瞬間接着剤を用いた検体処理法

◎阿部 幸輝[1)]、鬼海 凌司[1)]、阿部 芙沙子[1)]、鈴木 俊市[1)]、菅原 永里奈[1)]、近藤 敏仁[1)]
鶴岡市立荘内病院[1)]

【はじめに】

内視鏡的粘膜下層剥離術 Endoscopic Submucosal Dissection (ESD)は外科手術と比較し、局所のみの切除で臓器をほぼ温存できるため、生体への侵襲が少なく、その普及は目覚ましい。

一方、病理標本作成を行う過程の問題点として約２ｍｍ間隔に切り出された薄切面を立てて包埋しなければならない。これまでＥＳＤ検体が倒れないよう梱包材などを使用する方法をとってきた。しかし、包埋時に検体が倒れてしまい薄切面が逆になる事例が発生し対策に苦慮していた。寒天やゲルなどを使用する方法も報告されているが病理医の意向により使用を控えてきた。

これらの問題を踏まえ、濾紙と瞬間接着剤（アロンアルフア：東亜合成株式会社）を用い簡易で、かつ低コストな標本作製を考案したので報告する。

【作製方法】

①濾紙を検体の大きさに合わせて切る。
②濾紙に瞬間接着剤を可能な限り薄く塗る。
③ＥＳＤ検体を立てて濾紙に貼り付ける。
④自動包埋装置に通常通りセットする。
⑤パラフィン包埋時に濾紙ごと包埋する。
⑥薄切、染色を行う。

【結果】

瞬間接着剤を用いることでブロック作成時の薄切面の間違いや、枝番の間違いを減らすことが出来た。また、切出し、包埋の時間短縮にもつながった。貼り間違えた際もアセトンを使用することにより安全にはがすことが出来た。

【考察】

アロンアルフアは医療現場でも軟組織接合用接着剤として使用されている薬剤である。また接着面は水および生体分泌液、キシレンにも影響を受けにくいことから、自動包埋装置に負担をかけることなく使用可能である。染色性についても接着剤部位は面出し時に削られるため、組織に影響を与えることが少ない。今後ＥＳＤ以外の使用方法も検討し、より良い標本作製と、検査精度の向上に努めていきたい。（鶴岡市立荘内病院病理科 0235-26-5188）